

# 宗教と自然環境破壊

— 伝統的宗教は現在の環境危機にどうかかわるか —

畠 中 和 生

(2002年9月30日受理)

Religion and Environmental Crisis: How Are Traditional Religions  
Related to the Modern Environmental Crisis?

Kazuo Hatakenaka

It is the aim of this paper to consider how traditional religions are related to the modern environmental crisis. Here I investigated following topics critically. 1. Blame for the Judeo-Christian attitude toward nature. 2. Blame for modern western view of nature (the mechanistic view of nature and the thought of domination of nature). 3. Eastern view of nature and Japanese Eco-nationalism. 4. Contribution of traditional religions to the solution of environmental problems. By this investigation I suggested that in thinking the environmental problems we should not praise the religions of our own culture and should not blame the religions of other cultures.

Key words: Religion and Environmental Crisis, Environmental Ethics, Eastern and Western View of Nature

キーワード：宗教と自然環境破壊（環境危機）、環境倫理、東西の自然観

## はじめに

かつて私は、生命の平等について考えてみるために、環境倫理学における「自然の権利」という思想を取り上げ、批判的考察を行なったことがある。その際に、冒頭で次のように書いた。

「生きとし生けるものはすべて平等に生きる権利をもつといわれることがある。しかしその中身をより具体的に考えるとき、この権利の実質的な実現がいかにかに難しいかを、私たちは知らされる。生命あるものはすべて平等に生きる権利をもつという主張は、ただそれだけでは何もいっていないに等しい。ましてや、そういう内容のことが自文化圏の伝統に見いだされるといっただけで、自文化の優位を主張し、他文化を非難するにいたっては、かえって議論が不毛に終わってしまう恐れがある。そもそも過去においてそういった類の教えが、あらゆる生きものに対し

て平等に生きる権利の承認をほんとうに意味したのかははっきりしない。さらに、伝統があったからといって、その伝統が今も実質的に息づいているとはかぎらないからである（不殺生を説く仏教国なのに、公害の国、ゴミの国、森林自然破壊の国もある！）。いうまでもないが、伝統があるなしに関係なく、大切なのは私たち自身がこれからどう考えるかにある」（畠中b: 33 頁）。

自分の文章をあえてここで引用したのは、当時と比べて現在の私の考えに基本的な変更がないからである。ただし、のちにこの主題について論じた機会はあるものの（畠中c: 11-12頁）、そこでも、あまり綿密な議論を展開したわけではない。小論では、補足の意味も込めて、再度この主題について論じることにしたい。

小論ではまず、現在問題となっている環境危機の歴史的起源として槍玉にあげられることのあるユダヤ・キリスト教的世界観について、反論も含めて考察する。

次いで、ユダヤ・キリスト教的世界観を補強したとされる西洋近代の自然観を批判するやり方としてしばしば見られる、東洋思想を賛美する一部の傾向について吟味する。そして、現在の環境破壊を考える際に、その元凶として、あるいは反対に打開策として、宗教思想を持ち出すことがはたして意義のある試みなのかどうかについて論じてみたい。

## 【1】ユダヤ・キリスト教的世界観の批判について

### 1. リン・ホワイトの批判

欧米の環境倫理思想に通じていないひと、あるいは現在の環境危機と宗教とのかわりを考えたことのないひとにとっては奇異に思われるかもしれないが、現在の環境危機の歴史的起源がユダヤ・キリスト教的世界観にあるとする考えは、その是非はともかくとして、いまでは欧米の環境倫理思想の歴史のなかにその一部として位置づけられているようである<sup>1)</sup>。

きっかけは、アメリカの科学史家L・ホワイトが、全米科学振興会(AAAS)の科学雑誌『サイエンス』の1967年3月号に、「現在の生態学的危機の歴史的起源」という論文を発表したことにあった。この論文が提出したテーマは、G・ハーディンの「共有地の悲劇」とともに、その発表後から1970年代にかけてさかんに議論されたものである<sup>2)</sup>。

ホワイトは、現在問題になっている環境危機の歴史的起源は、有史以来もっとも人間中心的な宗教であるユダヤ・キリスト教的世界観にあると主張し、これが、肯定否定を含めて、多くのひとびとによる論争を巻き起こしたのである。鬼頭秀一は、これを「リン・ホワイトの衝撃」(鬼頭:36頁)と呼んでいる。

そこでまず、その自然支配的思想の象徴とされる『旧約聖書』における当該の記述と、それと関連させて引用されることのあるアウグスティヌスの言葉を、確認のため引用しておこう<sup>3)</sup>。

「神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」(『創世記』1.26)。

「神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地のものを這う生き物をすべて支配せよ。」(『同』1.28)。

「神はノアと彼の息子たちを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、地に満ちよ。地のすべての獣と空のすべての鳥は、地を這うものすべてのものと海のすべての魚と共に、あなたたちの前に恐れおののき、あなたたちの手にゆだねられる。動いている命あるものは、すべてあなたたちの食糧とするがよい。」(『同』9.1-3)。

「動物を殺し、植物を滅ぼすのを差し控えることは迷信の極みだと、キリスト自身が教えている。なぜなら、われわれと獣と木のあいだにはなんら共通する権利がないものと判断したので、かれは悪霊どもを豚の群れのなかにはいりこませたのであり、また実を結ばないでいる木を呪って枯らしたのである。…豚が罪を犯しているのでも、木が罪を犯しているのでもなかったことは、たしかである」(Passmore: 訳191頁より再引用)。

こうした文言のうちにユダヤ・キリスト教の自然支配的傾向を読み取ろうとする解釈が現れることになるのだが、ホワイトは、はっきりと、現在の環境危機の歴史的起源はユダヤ・キリスト教的世界観にあるとし、以下のような解釈から、「キリスト教は世界がこれまで知っているなかでもっとも人間中心的な宗教である」(White: p.12/訳87頁)と断言する。

「神は人間の利益と統治のためという明白な目的のために人間以外のすべての存在をお創りになられた。すなわち、いかなる自然の創造物も人間の目的に奉仕する以外の目的をもっていなかった」(White: p.12/訳87頁)。

さらにホワイトによれば、「キリスト教は人間と自然との二元論を樹立しただけでなくて、人間が自分の目的のために自然を搾取することは神の意志であると主張してきた」(White: p.12 /訳88頁)し、「異教的アニミズムの破壊によって、キリスト教は自然物の感情に頓着せずに自然を搾取することを可能にした」(White: p.12/訳88頁)のである。それはユダヤ教徒やキリスト教徒だけに限定される過去の話ではない。彼によれば、現代の科学・技術も、自然との関係に対するキリスト教的な態度が普遍化された形態にほかならない。

「われわれの科学と技術とは人と自然との関係にたいするキリスト教的な態度から成長してきたものである。その態度をほとんど普遍的に、キリスト教徒や新しいキリスト教徒だけでなく、他愛もなく自

分のことを脱キリスト教時代の人間とと思っている人びともまたとっているのである。…われわれは自然より優越しており、自然を軽蔑しており、自分たちのつまらぬ気まぐれのために自然を使おうとしている」(White: p.13/訳92頁)。

こうしてホワイトは、「われわれが生態についてなにをなすかは、われわれが人=自然の関係についても思想に依存している。さらに、多くの科学も、さらに多くの技術も、われわれが新しい宗教を見つけるか、それとも古い宗教について考え直すまでは、いまの生態学上の危機からわれわれを救い出してくれそうにない」(White: p.13/訳92-93頁)と述べ、後者の可能性としてアッシジの聖フランチェスコへの評価で締め括っている。

ところが、驚いたことに、晩年ホワイトは、ジョークのつもりでいって見たのが、まわりに担ぎ上げられて、引っ込みがつかなくなった、と中山茂に語ったそうである(中山: 2頁)<sup>5)</sup>。もしこれがほんとうだとすれば、まともに取り合う必要もないことになるがそうとも言い切れない面もあるのである。というのも、ユダヤ・キリスト教の世界観のうちに自然支配的傾向を見て取ろうとする思想家はホワイトだけではないからである。

たとえば、M・シェーラーは、ホワイトよりも40年以上も前に、人間による自然支配の思想は歴史的にユダヤ教から派生したとして、次のように批判している。

「歴史的にユダヤ教から派生した、人間による一方的な自然支配の思想は、…あらゆる反対運動があったにもかかわらず、ますます、いわばヨーロッパ的な〈世界エートス〉のひとつの公理となり、ついに自然という機械を唯物論的に絶対化するという結果をはじめて生み出すにいたった。それゆえこの自然支配の思想は将来において原理としては粉碎されなければならない」(Scheler: S.113/訳188頁)。

シェーラーは、現在の用語でいえば「自然との共生」の思想として解釈できなくもない「宇宙的一体感」(die kosmische Einfühlung)の再生を強調するなかで、それから生まれてくる運動として、動物愛護の運動、生体解剖反対運動、植物愛護や森林保護、景観保護の運動などに言及しているが、興味深いことに、ホワイトと同様に、アッシジの聖フランチェスコを高く評価している。シェーラーとホワイトとの関係についてははっきりしないが、ユダヤ・キリスト教の世界観のうちに自然支配的傾向を見て取ろうとする思想家

がホワイトだけではないのは確認できたであろう。

だとすれば、ホワイトの見解をたんなるジョークとして遣り過ごすわけにはいくまい<sup>6)</sup>。とりあえず、次にホワイトに対するいくつかの反論について見ておくことにしたい。

## 2. ホワイトに対する反論

ホワイトに対する反論として、まず、聖書解釈にもとづくいわば内在的な批判と、科学史的視点からの批判の二方向があげられよう。

前者の代表例は、J・パスモアによる反論である。彼によれば、「万物は人間のために作られた」と解する点にユダヤ・キリスト教の「尊大さ」があるとすれば、それは「ユダヤ・キリスト教的尊大さ」ではなく、「ギリシア・キリスト教的尊大さ」にある。そのルーツは『旧約聖書』の教えから派生し、これがキリスト教へと受け継がれていく伝統のなかにあるのではなく、ストア主義から派生し、さらにこれがキリスト教へと受け継がれていく伝統のなかにある(Passmore: 訳24-25頁)。そして『創世記』の記述は、支配の精神ではなく、むしろスチュワードシップ(神の信託管理人思想<sup>7)</sup>)として捉え直すことができるとされている(Passmore: 訳48-71頁参照)。

P・ドーベルはある書店のエコロジーのコーナーで環境破壊とキリスト教について書いてある著書を調べてみたら、すべてがホワイトの論文を参照しているのを発見したと述べている。つまりキリスト教が今日の環境問題の根本原因だとする主張は、ホワイト論文以外に見当たらないというのである。そのうえで、ドーベルは、ホワイトのそうした見解に反対し、ユダヤ・キリスト教の自然に対する態度は、けっして支配的態度ではなく、スチュワードシップの倫理であることを、聖書解釈から導き出している(See Dobel: p.20-23/訳292-295頁参照)。

こうした自然に<sup>・</sup>関<sup>・</sup>係<sup>・</sup>す<sup>・</sup>る<sup>・</sup>ス<sup>・</sup>チュ<sup>・</sup>ワ<sup>・</sup>ード<sup>・</sup>シ<sup>・</sup>ップ<sup>・</sup>の<sup>・</sup>解<sup>・</sup>釈<sup>・</sup>は、それが、1960年から70年にかけてあらわれていることからすれば、もともとそうであったというより、現在の自然環境破壊に促された再解釈の動きであると解したほうがよいであろう。R・F・ナッシュによれば、アメリカにおいて宗教上の環境責任を考えているひとびとは、「神は人間に自然を搾取する許可は与えていないが、保護するよう命令している」と解釈し、『創世記』で許されている「支配」は、専制政治でなく、信託政治を示しているという。すなわち、彼らにとって人間は「神のもっともお気に召された存在として、他の創造物の幸福を管理する——つまり、神の創造を完成させる——任務をもつ」(Nash: p.96/文庫

版訳240頁)のである。

後者については、たとえば村上陽一郎による批判がある。彼は、ホワイトの議論には次のような混乱があるという。

「一方では、ヨーロッパにおける科学と技術がともに、ユダヤ・キリスト教的原理で統一的に動いてきたことを言うために、ヨーロッパの歴史全体（それは紀元800年ごろから現代まで、という時代区分を持たされる）の一体性をことさらに強調して言わなければならないと同時に、しかし、いわゆる生態学的な危機が、ヨーロッパの歴史全体を通じて常にもたらされていた、という、俄かには信じ難い主張に陥らないために、その「一体性」に、ある程度の保留をおかなければならない、というディレンマに立たされて、いささか混乱しているように見える」（村上a: 108頁）。

村上は、ホワイトの主張する、ヨーロッパの農業技術の成熟がすでに「中世」に完了していたという主張は認めたくなくて、ヨーロッパ「中世」の技術的成熟が、ホワイトの主張する「自然の飽くなき征服と搾取」という、通常「西洋近代文明」に属すると考えられる特徴をそのまま示していたか、という点の不正確さを指摘する。生態学的危機をまねいた近代・現代西欧の「自然の搾取」の姿勢を、うえにあげたようなユダヤ・キリスト教的自然観と人間観にすべて収斂させようとするなら、すでに「中世」の技術的成熟にあっても、その特徴があからさまに発揮されていなければならないからである（村上a: 107頁）。

ホワイトとは違い、村上は、「文明」のイデオロギーこそが、自然の意志や感情を一切顧慮することなく、人間のほしいままに自然を搾取することを許した、もっとも直接的な源泉である、と考えている（村上a: 128頁）。彼は、近代化の特徴のひとつとして、「文明化」(civilization)をあげる。この〈civilization〉が意味するところのものは「自然を都市化する」ことであり、そこでは、「人為」は「自然」と対置されている。したがって、「文明」という概念が運ぶイデオロギーは、「人為によるより徹底した自然の管理」を目指すことであった（村上a: 78頁）。

村上によれば、こうした「文明」は、「攻撃性」を持っている。これは、「自然」に対する攻撃性であるとともに、「他の文化」に対する攻撃性という、二重の攻撃性を意味する。村上は、文明が内包するこうした攻撃的性格を「文明のブル・ドーザ的性格」と呼ぶ（村上a: 82-84頁）。

「文明」という概念がこのようなものだとすると、ここから、この概念の成立と近代的な科学・技術の誕生との間の内的連関が明らかになる。すなわち、「自然についての学問的知識を利用すれば、人間が自然を支配し、制御し、管理するという目標は達成しやすくなる」（村上a: 79頁）からである。

村上にしたがえば、こうしたブル・ドーザ的性格を有する「文明」という概念が出現したのは、ユダヤ・キリスト教が西欧の思想と文化への拘束力を喪失し、18世紀啓蒙思想が興隆してきたところに求められる（村上a: 128頁）。このように見てくると、近代文明と科学・技術との関係を明確に設定しないままに、キリスト教と科学・技術とを直接歴史のうえで結びつけてしまうホワイトの主張は、不十分な議論といわざるをえないのである（村上a: 129頁）。

最後に、小論の主題とかがわる反論をあげておきたい。すなわち、伝統があったから現在の環境破壊が起ったという発想そのものが間違っている、という趣旨の反論である。たとえば、K・S・シュレーダー＝フレチェットはこう指摘する。

「宗教的伝統に環境悪化や資源枯渇の責任があるというよりも、むしろ、貪欲やエゴイズムや見通しの狭さが、環境問題の大部分を引き起こしたというのがほんとうではなからうか。たとえほんとうにキリスト教が自然に対する完全な支配を人間に認めたのだとしても、ユダヤ・キリスト教の信仰は、貪欲などのような悪徳をけっして是認してこなかった。ユダヤ・キリスト教の人々が貪欲を発明したのではない。彼らが貪欲を発明したのでないかぎり、環境問題についての最終的な「責め」は、とりたてて宗教ではなく、一般に人間の振る舞いに負わされねばならないと私には思われる」（Schrader＝Frechette: p.20/訳38頁、傍点は筆者による）。

### 3. 伝統が環境破壊の元凶か

以上、現在の環境危機の歴史的起源はユダヤ・キリスト教的世界観にあるとする考えについて、その反論も含めて見てきた。私自身にとっては、シュレーダー＝フレチェットの見解がもっとも腑に落ちる見方である。繰り返せば、彼女の反論は、伝統思想があったから現在の環境破壊が起ったという発想そのものが間違っており、むしろ責任は人間自身にある、という趣旨の反論であったが、さらに彼女は先の文章に続けて、次のようにも述べている。

「とはいえ、西洋のキリスト教が東洋の宗教や非

ユダヤ・キリスト教的宗教以上に、人間のこれらの性向をつのらせたということは当たっているかもしれない。ところが、日本のような国々の環境問題をみれば、西洋が東洋以上に自然を悪化させてきたのだろうかと疑う理由もあるのである」(Schrader = Frechette: p.20/訳38頁)。

彼女に指摘されるまでもなく、伝統思想があっても環境破壊が起る実例を私たち自身がよく知っている。だとすれば、自文化の伝統に自然保護に合致する思想があるからといって、環境問題を考えて行く際にそれを持ち出して、ことさら称揚することにどれほどの意義が存するのであろうか。以下では、この点について吟味検討してみたい。

## 【2】西洋近代の自然観批判について

### 1. 西洋近代の自然観

私自身は、環境保護の要諦のひとつが西洋近代の見直しにあるという主張は、おそらく正しいであろうと思っている。けれども、そうした主張が、たんに西洋近代の自然観の特徴を析出し、それに東洋思想や自国の伝統思想を対置してみせることだけに終わってしまっているのだろうか。この点を考えてみる前に、まずは、批判の対象としてしばしば持ち出されることの多い西洋近代の自然観とは、一般にどのように理解されているのかについて確認しておきたい。

周知のように、こうした文脈でしばしば取り上げられるのが、R・デカルトの機械論的自然像とF・ベーコンの「自然支配」の理念である。たとえば、伊東俊太郎は、現代を「人類がこれまで経験してきた強大な革命期——「人類革命」,「農業革命」,「精神革命」,「科学革命」——に次ぐ、「環境革命」とも称すべき巨大な革命期」に遭遇しているとし、その達成のためには、「科学技術の在り方」,「世界観の在り方」,「文明の在り方」の三つを変革しなければならない、という。伊東にとって、ここで変革すべき世界観こそ、デカルトの機械論的自然像とベーコンの「自然支配」の理念にほかならない。

伊東によれば、デカルトの「機械論的自然像」とは端的にいえば、この自然的世界から生命的なもの、物質的なものを一切排除し、それを一様な幾何学的「延長」に還元することを意味する。この「延長」を切り刻むと、形、大きさ、運動という量だけをもった微粒子になる。そういう微粒子の要素的振る舞いを明らかにしてゆけば、この世界が把握され、それゆえコントロールしてゆくこともできるのである(伊東c: 53頁)。

一方、ベーコンの自然支配の理念はこう説明されている。ベーコンは「知が力である」ことを標榜し、実験を重視した。これは自然を拷問にかけて、人為的に操作し、それを利用して自然を征服し、自然のうえに「人間の王国」を作り上げ、人間の福祉や利便を増大させてゆくという考えを確立した。そしてこのベーコンは、「自然を支配する権利を、人間は神から授かっている」と明言している、と(伊東c: 54頁)<sup>8)</sup>。

### 2. 西洋近代の自然観批判

すでに述べたように、伊東が環境問題においてデカルトの機械論的自然像とベーコンの「自然支配」の理念を持ち出したのは、それが克服すべき自然観だからであるが、同様の批判はほかにもある。

周知のように、近代哲学の「脱構築」や「ポストモダン」を標榜する動向のなかでとりわけ超克の対象として取り上げられるのが、「近代哲学の創始者・デカルト」であるが、この動向に呼応するものとして、近代の科学・技術による自然支配というものを糾弾し、そのような自然支配の思想的基盤としての西洋近代科学に異を唱えようという風潮がある。この風潮のなかでもとりわけ槍玉にあげられるのが、近代科学の設定者としてのデカルトである(小林: 316-317頁)。たとえば、一時期わが国でもブームとなったニュー・サイエンス<sup>9)</sup>の代表的人物F・カブラは次のように述べている。

「今日の危機もまた、時代遅れの世界観——デカルト＝ニュートン科学という機械論的な世界観——ではもはや理解できないリアリティに対して、そうした概念を適用しようとするところから生まれてきている。今日われわれは地球規模で相互に結ばれた世界に住んでいるから、生物学的、心理学的、社会学的、環境的現象はすべて相互に依存している。このような世界を正しく記述するには、デカルトの世界観にはないエコロジカルな視点が必要である」(Capra: 訳15頁)。

日本人による批判も見ておこう。たとえば、梅原猛<sup>10)</sup>はある公開シンポジウムで「デカルトは近代を作った大恩人であると同時に大悪党である。なぜなら彼の唱えた二元論は人間と自然を対立させ、人間が自然を支配することによって進歩すると考えたからだ」(中国新聞)と語り、さらに環境問題と関連させて、次のようにもいう。

「この危機(＝環境破壊)から人類を救い出すためには、当面の対策も必要ですが、まずその哲学を

変えねばなりません。近代文明を指導したデカルトやベーコンの考え方は、人間と自然とを峻別し、自然を客観的に研究する自然科学の知識によって、自然を征服する技術をもととする思想です。かくて、自然科学は飛躍的に発展し、人類は、自然について三百年前にもっていた知識とは、比較できないほどの精密な知識をもつようになった。そしてそれとともに自然征服の技術は飛躍的に進み、人間は自然から、それまでの人間にはとうてい考えられないような豊かな富を生産することができるようになった。そしてその代償に、地球環境の破壊という、まさに人間は、自分の生きている土台を根底から崩壊させるような危機に直面したわけです」(梅原d: 195頁)。

こうしたデカルト解釈、ベーコン解釈に対しては、すでに見てきたホワイトの議論に対するのと同様に、識者から反論が試みられているが、これについてはここではふれないでおこう<sup>11)</sup>。ここで示唆しておきたいのは、こうした一般化・単純化が次章で述べるような言説に容易に結びつきやすいという点である。

### 【3】日本の思想が世界を救う？

#### 1. 日本の思想が世界を救う？

環境保護の思想の根本が日本の文化伝統にあるという言説はよく聞かれ、それどころか、日本の思想が世界を救う、といったニュアンスの発言を聞くことも多々ある。こうした発言の場合、環境問題の思想的元凶がうえて述べたデカルトの機械論的自然像とベーコンの「自然支配」の理念に、さらに遡ってユダヤ・キリスト教の創造説にあるとし、これに對置する形で、東洋の思想を持ち出すことが多い。行き詰まった西洋文明にかわって世界を救うのが、ほかならぬ東洋の叡智というわけである。

たしかに間瀬啓允がいうように、「東洋の思想というのは、自然と人間を別々のものとはみない——つまり人間は自然の一部であり、本当の人間の幸福というものは、自然全体の大きな法則にしたがって生きていくことにあるのだという人間観、世界観のほうがはるかに強い」(間瀬b: 145頁) のかもしれない。アニミズム(万物に靈魂が宿る)、パンセイズム(自然即神、神即自然)、自然崇拜、不殺生など、どれもこれもいいが、これらがつまらない思想だといっているわけではけっしてない。

前章で見たように、伊東や梅原が西洋近代の自然観を批判するからといって、彼らが日本の伝統思想の優

位性を主張しているわけではない。なぜなら、文章を読むかぎり、彼らは東洋思想による西洋近代文明の超克を主張しているわけではなく、「東西文明の統合」を主張しているからである<sup>12)</sup>。

ただし、たとえ本人たちが否定するにせよ(また、おそらく実際に否定するであろうが)、伊東や梅原らの主張が、テッサ・モーリス鈴木が解するように、現在の環境問題に対する「解答の重要部分は、日本のエートスと文明のうちに存在している」(鈴木: 54頁) という主張だと解されるとすれば、それはたんに誤解だと退けてよいであろうか。たとえば、商業誌に掲載された「日本文明は世界の孤児か」という彼らの対談名に添えられた「万物は永遠に循環する——我々には、西欧文明が忘れた人類根底の思想があることを忘れてはならない」という副題を読むと、内容云々以前に、鈴木のような解釈が呼び起こされることは否定できない。だとすれば、彼らがそう主張しているわけではないのは確かだとしても、やはり日本のエートスと文明にそれほどの力が存するのだろうか、と問わざるをえない。

#### 2. 日本版エコ・ナショナリズムの弱点

西洋の自然観と東洋の自然観という区別自体が単純化されすぎている点はひとまず置いておこう。それ以上に疑問なのは、日本のエートスと文明にそれほどの力が存するののか、という点である。

残念ながら、それがたんなる過剰な期待にすぎないのは、なによりも歴史的事実からみて明らかである。日本の自然観が環境破壊の歯止めとして機能しなかったことは、海外においても有名なことであり、たとえばシュレーダー＝フレchetteやパスモアらは、伝統があっても環境破壊が起った国の実例として、ほかならぬ日本をあげている(Schrader = Frechette: p.20/ 訳38頁; Passmore: 訳16頁; Vesilind & Gunn: 訳120頁)。今日では、中国でも環境問題は深刻な社会問題になっていることを鑑みれば、東洋の思想や文化、伝統が、現在の環境破壊を前にしてほとんど有効でなかったことは、歴然とした事実なのである。だとすれば、結局、日本人の自然観とは何であったのか。間瀬はこう述べている。

「近代文明の優等生的採用者であった日本が、自然破壊においても優等生であったという事実は、だれよりもわれわれ自身が一番よく知っている。自然愛好国民である日本人が、明治以降ももっともはなはだしい自然破壊者になっている。自然愛やアニミズム、パンセイズムの伝統のもとにありながら、明治から大正、昭和にかけても、ついこの間まで、自

然破壊を糾弾する思想は育ってはいなかった。…私の理解からすると、日本人の自然愛といい、アニミズム、パンセイズムといい、実はそれらは漠とした自然にたいする感性的な反応でしかなかったのだ」(間瀬b: 145-146頁)<sup>13)</sup>。

ところで、エコ・ナショナリズムとは、端的に言って「自国や自民族の文化や伝統や価値観などを世界に広めてゆくことで、環境問題が解決するというふうを考える思想」(森岡: 47頁)のことだとすると、これまで述べてきた日本の伝統思想に今日の環境危機の打開策を求めようとする試みは、まさにエコ・ナショナリズムの一種と見なしてよいであろう。これを日本版エコ・ナショナリズムと呼ぶとすれば、この日本版エコ・ナショナリズムの弱点とはいったい何か。それは、鈴木が指摘するように、「経済構造や社会構造を変革して、今日の環境危機を打開しようとする困難な問題に直面するのを、回避するという弱点」(鈴木: 57頁)にほかならない。

自国の文化に、誇るべきすばらしい伝統思想があることはよいことだ。しかし、環境問題にかぎっていえば、たんにそういう思想があるだけのことである。伝統思想を持ち出すにしても、「自国の文化的伝統を再評価すれば、解決策が見つかるだろうというのは、気休めにすぎない」(鈴木: 54頁)という厳しい忠言を肝に銘じておくべきだろう。

#### 【4】それでも、宗教や伝統思想に何ができるか

ういで引用したように、間瀬は、環境危機の打開策として持ち出される日本人の自然観を、自然にたいする感性的な反応でしかなかった、という。では、彼はその打開策をどこに求めているのだろうか。詳細にはふれないが、彼は、それをステュワードシップの伝統に求めており、最終的には、「自然との霊的結合」に訴えている(間瀬c: 172-204頁; 同d: 182-186頁参照)。現在のエコロジー神学成立の動きを見れば、日本人の自然観に比して、キリスト教的伝統の自浄能力のほうが高らかに高いことは率直に認めるべきであろう。

しかし、その内容がどれほど優れているにせよ、ここでは、環境保護により合致した別の宗教思想を持つて来ただけのことであり、その点では、なんら変わりはないのではなからうか。日本のエートスと文明に見いだすのよりも、こちらにこそ環境危機を打開する力があるとしても主張するのだろうか。

私には、そうしたエコロジー的な宗教を持ち出すこ

とでそれほどの変化はないと思われる。ただそれでも、あえて宗教や伝統思想に何ができるか、と問われれば、次のようにいわざるをえない。

村上は、多くの宗教家、信者、神学者は反対するだろうし、そして彼自身も一人の信仰者として、それを肯定するには躊躇があるといいつつも(さらにいえば、以下の私の引用の仕方にも異議があるというかもしれないが)、宗教の本質を「肥大化する人間の欲望の制御機構としての働き」あるいは「[過剰・不足]のディレンマの解消」にあると見え、こう述べている。

「しかし社会現象として捉える限り、人間の共同体の過去の歴史を振り返っても、宗教と呼ばれる文化現象が、人間の欲望の「過剰」に対する制御機能を果たしてきたことは明白であり、また多くの組織宗教が、その教義のなかに、人間の行動規範、あるいはその原理を組み込んでいることも確かである。…人間は、そうした欲望の制御機構や、「過剰・不足」のディレンマの解消のための何らかの装置、仕掛け、あるいは制度をも、自ら作り出さなければならなかった。そして宗教はその重要な一つであった」(村上b: 8-9頁)。

先に引用したように、シュレーダー＝フレチットは「宗教的伝統に環境悪化や資源枯渇の責任があるというよりも、むしろ、貪欲やエゴイズムや見通しの狭さが、環境問題の大部分を引き起こしたというのがほんとうではなからうか」(Schrader=Frechette: p.20/訳38頁)と述べているが、この貪欲やエゴイズムを助長したのが、近代科学・技術文明であった。宗教や伝統思想に何ができるか、と問われれば、その答えは、近代科学・技術によって「肥大化する人間の欲望の制御機構としての働き」あるいは「[過剰・不足]のディレンマの解消」の働き以外にはないのではなからうか。

ただし、「自然破壊は、伝統的な宗教などの教義の影響力の衰えた後で起っている。自然破壊の前に、伝統破壊があった」(加藤: 140頁)のだとすれば、いま宗教にこうした欲望制御の力が残っているのかどうか。これを問うことは、現代社会における宗教の力を再考してみることにほかならないのである。

#### むすびにかえて

以上、識者の見解を参考にしながら、現在の環境問題を考える際に、環境危機の元凶としてあるいは反対にその打開策として、伝統的な宗教思想を持ち出すことがはたして意義のある試みなのかどうかについて、

批判的に論じてきた。誤解があるかもしれないので、最後に、いくつか付け加えておきたい。

西洋近代の自然観批判について述べた箇所では伊東と梅原の見解を取り上げたが、その際、彼らが現在の環境危機の打開策として伝統的な宗教思想を持ち出すことだけに終始しているかのような印象を与えたかもしれない。伊東は、「世界観の在り方」以外に、同時に「科学技術の在り方」と「文明の在り方」の変革を主張しており、また梅原の引用文も「この危機（＝環境破壊）から人類を救い出すためには、当面の対策も必要ですが」という断り書きからはじめており、このかぎりでは、彼らが西洋の自然観批判と自文化の伝統の再評価に終始し、それ以外の要因を無視しようとしているわけではないのは、とりあえずは明らかといえよう。

ただし、すでに指摘したように、たとえ本人たちが否定するにせよ、新聞や一般商業誌に登場するほど社会的影響力の大きい彼らの主張が、現在の環境問題に対する「解答の重要部分」は、日本のエートスと文明のうちには存在している（鈴木：54頁）という主張として読者に読まれかねない雰囲気があるということ、ここで再度強調しておきたい。

率直に言って、私自身も日本も含めた東洋思想の伝統を否定する気持ちなどさらさらもっていないし、むしろ大いに共感をおぼえている。一時は、伊東や梅原と似たような方向で環境問題を考えてみたこともあった。ただし、振り返ってみて、それでなにか現状が変わったのだろうか、という憔悴感しか残っていない。ますます自然環境の破壊が進んでいるいま、自文化の伝統の再評価に終始してもなにも始まらないということだけははっきりしている。思想内容が優れているがゆえに、「美しい日本の私」に酔ってしまい、その後の思考を停止させる可能性がある分、かえってしまつが悪いといえるかもしれない。過去の伝統文化や思想を再評価するにしても、こうした点はずねに念頭に置くべきことだと思われる。

## 【注】

- 1) たとえば、L・ポジマンが編集した『環境倫理基本論文集』の第一部理論編の最初に、「西洋の自然哲学—現在の生態学的危機の起源」という項目があり、ホワイトの論文が収録されている（Pojman: p. 9-14）。また、アメリカの環境倫理思想の歴史をまとめたナッシュの『自然の権利』には、「宗教の緑化」という章があり（Nash: p.87-120／文庫版訳221-294頁）、ユダヤ・キリスト教的伝統の告発に関する記述から始まっている。
- 2) ‘A Very Short History of the Origins of Environmental Ethics for the Novice’ <<http://www.cep.unt.edu/novice.html>>, in: *Environmental Ethics* HP <<http://www.cep.unt.edu/>>
- 3) 『創世記』の当該の記述も、Pojman: p.6-8に収録されている。
- 4) アッシジのフランチェスコ（1181/82-1226）。イタリアの神秘家、聖人。フランシス修道会の創始者。フランチェスコは深く自然を愛し、神の愛を体験し、また修道生活に免れ難い力と富との危険を除き、清貧を否定的禁欲の手段とせずこれを歓喜に変え、修道生活の高い理想を実現した（岩波『西洋人名辞典 増補版』、1230頁より抜粋）。
- 5) ド・スタイガーは、こう指摘している。「伝統的なキリスト教に対するホワイトの非難は驚きをもって迎えられたかもしれないが、これもまた1960年代後半の偶像破壊と軌を一にしていた。…リン・ホワイト・ジュニアの真意をくみとろうとするとき、彼の著作が社会的・思想的真空のなかから生まれたわけではなかったことを認識することは重要である。伝統的諸制度を拒絶することが非常に流行っており、しばしば次に何をやり玉にあげるかをあたかも競っているかのように思われた」（de Steiguer: 訳99頁）。ホワイトがひっこみがつかなくなったのは、こうした1960年代後半のアメリカの社会背景と無縁ではなかったのだろうと推測できる。
- 6) キリスト教の側にも、ホワイトの主張を、たとえ論駁はたやすいにしても、それゆえに切り捨てることなく、むしろ重要な問題提起として受け止めようとする、次のような見方もある。「ホワイトの主張に対しては、近世の世俗主義に基づく産業社会の文化構造とキリスト教の人間論とを混同している、などの逆批判もなされてきた。確かに、今日の科学史の見地あるいは聖書学的視点から、彼の主張点のいくつかを論駁することはさほど難しいことではない。しかし、問題はそのような枝葉末節にあるのではない。むしろ、ホワイトの問題提起の中に見逃してはならないのは、キリスト教の世俗化の結果としての「人間の自律性」「人間中心主義」を問うているという点であろう」（芦名・小原：186-187頁）。
- 7) スチュワードシップの訳については、Nashの邦訳書にしたがった。なお、訳語の問題については、文庫版同訳書の291-292頁訳注(7)を参照されたい。
- 8) 伊東の西洋近代の自然観の解釈については、最新の著作から引用したが、デカルトとベーコンの解釈については早い時期から一貫しているようである。伊東 a, 同 b を参照されたい。



- 9) ニュー・サイエンスについては、次のような伊藤笏康の説明が参考になる。1960年代初めにアメリカ西海岸を中心にして、いわゆるカウンターカルチャー運動が起った。この運動自体はいったん姿を消したが、その運動のモチーフは、1970年代になってより積極的かつ理論的な形で復活する。つまり70年代を機に、(1)西欧近代の世界観や科学（とその方法）を理論的に批判する一方、(2)かつて無批判にあこがれた東洋の文化・思想を冷静に評価し、(3)究極的には新たな文化と人間観を想像しようとするさまざまな試みが一斉に浮上したのである。こうした思想、科学、生活など多領域にわたるこの人間観の改革運動を総称して、和製英語でニュー・サイエンスと呼ぶ（伊藤：692-693頁参照）。なお、私のニュー・サイエンス理解については、畠中 a を参照されたい。
- 10) 梅原のデカルト解釈も、伊東と同様、早い時期から一貫しているようである。たとえば、梅原 a; 同 b を参照されたい。
- 11) ここであげたデカルト批判とベーコン批判に対する反論については、たとえば、前者については、河野：85-107頁を、後者については、金子：90-109頁を参照されたい。
- 12) たとえば、梅原・伊東〔監修〕には、「東西文明の統合を求めて」という副題があるし、伊東 c の副題には「対立から統合へ」とある。
- 13) 間瀬 a: 12-14頁；同 c: 12-19頁；同 d: 172-174頁も参照されたい。

## 【引用・参考文献】

\* 引用頁数は本文中に記載する。欧語文献については、原著頁数／邦訳頁数（あるいは邦訳頁数のみ）の形で記載、訳文は一部変えた箇所もある。なお、ウェブサイトからの引用箇所は注に表記した。

- 芦名定道、小原克博〔2001〕『キリスト教と現代—終末思想の歴史的展開』、世界思想社。
- 伊東俊太郎〔1971〕a「自然」、伊藤俊太郎〔編〕『現代科学思想事典』〈講談社現代新書〉、講談社。
- 〔1978〕b「自然」、岩崎武雄・山本信〔編著〕『新版 哲学—何が問題なのか—』、北樹出版。
- 〔2002〕c『文明と自然—対立から統合へ—』、刀水書房。
- 伊藤笏康〔1997〕「ニュー・サイエンス」、木田元ほか〔編〕『コンサイス20世紀思想辞典第2版』、三省堂。
- 岩波書店編集部〔編〕〔1981〕『岩波西洋人名辞典 増補版』、岩波書店。

- 梅原 猛〔1968〕a「人間とは何か」、『理想』No.418、理想社。
- 〔1972〕b『哲学の復興』〈講談社現代新書〉、講談社。
- 〔1993〕c「いま何が問われているのか モダニズム信仰」、6月13日付朝日新聞主張・解説。
- 〔1995〕d『[森の思想]が人類を救う』〈小学館ライブラリー〉、小学館。
- 梅原 猛、伊藤俊太郎〔監修〕／伊藤俊太郎、安田喜憲〔編〕〔1993〕『草原の思想・森の思想—東西文明の統合を求めて』、講談社。
- 梅原 猛、伊藤俊太郎〔1994〕「日本文明は世界の孤児か」、『諸君』4月号、文芸春秋社。
- 加藤尚武〔1991〕『環境倫理学のすすめ』〈丸善ライブラリー〉、丸善。
- 金子 務〔1996〕「[森=迷路]的自然観と環境科学」、伊東俊太郎〔編〕『環境倫理と環境教育』〈講座〔文明と環境〕14〉、朝倉書店。
- 鬼頭秀一〔1996〕『自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク』〈ちくま新書〉、筑摩書房。
- 河野勝彦〔2001〕「環境哲学の構築に向けて」、尾関周二〔編〕『エコフィロソフィーの現在』、大月書店。
- 共同訳聖書実行委員会〔1991〕『聖書 新共同訳』、日本聖書協会。
- 小林道夫〔1998〕「デカルト哲学は乗り越えられたのか—現代のデカルト批判をめぐって」、湯川佳一郎・小林道夫〔編〕『デカルト読本』、法政大学出版局。
- 鈴木—テッサ・モーリス〔1992〕「エコ・ナショナリズムの逆説」、『世界』569号。岩波書店。
- 中國新聞社〔1993〕「人類は「共生」と「循環」の思想を—「科学技術と宗教」公開シンポ（無署名記事）」、7月15日付中國新聞。
- 中山 茂〔1994〕「環境思想の潮流」、『環境情報科学』23-1、社団法人環境情報センター。
- 畠中和生〔1995〕a「ものの見方は変わるか？…ニューサイエンス考…」、広島大学倫理学研究会〔編〕『倫理学研究』第8号。
- 〔1996〕b「生命の平等について—「自然の権利」という思想への疑問、あるいは、生命をめぐるジレンマ—」、広島大学学校教育学部紀要第II部第18巻。
- 〔1998〕c「[自然の権利]再考」、西日本応用倫理学研究会〔編〕『ぶらくしす』春号。
- 間瀬啓允〔1991〕a『エコフィロソフィ提唱—人間が生き延びるための哲学—』、法藏館。
- 〔1993〕b「生命倫理とエコロジー」、岩波講座『宗教と科学』第7巻、岩波書店。

- [1996]c 『エコロジーと宗教』〈叢書現代の宗教⑩〉, 岩波書店。
- [1998]d 「環境問題に宗教はどうかかわるか」, 加藤尚武〔編〕『環境と倫理—自然と人間の共生を求めて』, 有斐閣。
- 村上陽一郎 [1994]a 『文明のなかの科学』, 青土社。
- [1997] b 「日本の文化的基盤と超越的存在」, 河合隼雄, 村上陽一郎〔編〕『内なるものとしての宗教』, 岩波書店。
- 森岡正博 [1994] 『生命観を問いなおす—エコロジーから脳死まで』〈ちくま新書〉, 筑摩書房。
- Capra, F. [1982] *The Turning Point*, John Brockman Associates. [フリッチョフ・カブラ〔著〕／吉福ほか〔訳〕 [1984] 『ターニング・ポイント』, 工作舎]
- de Steigure, J. E. [1997] *The Age of Environmentalism*, The MacGraw-Hill Companies. [J・E・ド・スタイガー〔著〕／新田, 蔵本, 大森〔訳〕 [2001] 『環境保護主義の時代—アメリカにおける環境思想の系譜—』, 多賀出版]
- Dobel, P. [1977] “The Judeo-Christian Stewardship Attitude Toward Nature” in: Pojman, L. P.(ed.) [1994] *Environmental Ethics. Readings in Theory and Application*, Jones and Barlett. [P・ドーベル〔著〕／日本技術士会環境部会〔部分訳〕 [2000] 「自然に対するユダヤ—キリスト教の執事的な姿勢」, P・A・ヴェジリンド, A・S・ガン〔著〕／日本技術士会環境部会〔編訳〕『環境と科学技術者の倫理』, 丸善]
- Nash, R. F. [1989] *The Rights of Nature*, The University of Wisconsin Press. [R・F・ナッシュ〔著〕／岡崎洋〔監修〕, 松野弘〔訳〕 [1993] 『自然の権利—環境倫理の文明史』, TBSブリタニカ。ちくま学芸文庫 [1999] に収録]
- Passmore, J. [1974] *Man's Responsibility for Nature. Ecological Problem and Western Traditions*, Duckworth and Charles Scribner. [J・パスモア〔著〕／間瀬啓允〔訳〕 [1979] 『自然に対する人間の責任』, 岩波書店]
- Pojman, L. P. [1994] *Environmental Ethics. Readings in Theory and Application*, Jones and Barlett.
- Scheler, M. [1922] *Wesen und Formen der Sympathie*, in: Frings, M. S. (hrsg.) [1973] *Gesammelte Werke Bd.7*, Francke. [M・シェラー〔著〕／青木茂, 小林茂〔訳〕 [1977] 『同情の本質と諸形式』, 『シェラー著作集』第8巻, 白水社]
- Schrader=Frechette, K. S. [1991] *Environmental Ethics (Second Edition)*, The Boxwood Press. [K・S・シュレダー=フレチエット〔編〕／京都生命倫理研究会〔訳〕 [1993] 『環境の倫理』上・下, 晃洋書房]
- Vesilind, P. A. and A. S. Gunn [1998] *Engineering, Ethics, and the Environment*, Cambridge University Press. [P・A・ヴェジリンド, A・S・ガン〔著〕／日本技術士会環境部会〔編訳〕 [2000] 『環境と科学技術者の倫理』, 丸善]
- White, L. [1967] “The Historical Roots of Our Ecological Crisis” in: Pojman, L. P.(ed.) [1994] *Environmental Ethics. Readings in Theory and Application*, Jones and Barlett. [リン・ホワイト〔著〕／青木靖二〔訳〕 [1972] 「現在の生態学的危機の歴史的根源」, リン・ホワイト〔著〕／青木靖二〔訳〕『機械と神』, みすず書房]